

営農状況

苦難の時代を乗り越え

昭和10年代に入ると、営農状況は好転してきたとされている。しかし、経済は依然として厳しい状況が続いていた。そして、第二次世界大戦が近づくとつれ、食用作物の作付統制や軍需作物の強制作付などが行われ、家畜に対しての飼料作物の作付は著しい制限を受けることに。そんな悪条件下であっても、これまでの営農方法が続けてきた遠浅酪農の方々。この苦難の時代こそ、戦後の飛躍に結びつく基礎造りになったと記されている。

「遠浅酪農」という名が 全国に伝わりはじめる

昭和20年に終戦を迎えたが、戦時中

であつても遠浅酪農は動き続けた。

そんな遠浅酪農の名が終戦後の昭和24年ごろから全国的に知られるようになってくる。その大きな要素は「優良種牡牛生産」が挙げられる。ただそれだけではなく、昭和22年に発足した牛歩会（遠浅酪農の青年層が中心となつて動いた組織）が、乳牛の改良をはじめ、母牛の管理や牛乳の販売方法などをより良いものになしようと尽力したからである。厳しい時期でも奮闘してきたことが戦後の酪農界で際立ち、発展に大きな貢献をすることとなった。

90年を超える 歴史を紡ぐ

チーズの生産や

遠浅酪農の名が全国

区に広まっていつても、

すぐに物事が好転していく訳



ではなかった。昭和30

年代前半は、厳しい経済状況の中での酪農となったが、昭和35年ごろからは乳価が上昇するなど明るい兆しが見えてきた。経済もいかに好転していき、機械化などが進み生産性が向上。遠浅酪農は、この頃から急速に進展を成し遂げていき、安平町が誇る産業のひとつとなつていった。

昭和5年から動き出した遠浅酪農の歩み。今もなお、酪農に従事する方々によって、歴史が紡がれていく。きっとこれから、何年、何十年とこの歴史が続いていくのでしょうか。

※この特集は昭和45年に発行された「遠浅酪農史」をもとに編集しています。

